

neo

⚕ MEDICAL INFORMATION MAGAZINE ⚕

Autumn
2025

#09



かけがえのない日々を医療と共に。

福井大学医学部
感覚運動医学講座皮膚科学 教授

長谷川 稔

福井県立病院
看護部

宮嶋 仁美

福井大学医学部附属病院
内分泌・代謝内科 教授

原田 範雄

02

Doctor's Hand

福井大学医学部感覚運動医学講座皮膚科学
教授

長谷川 稔

12

Very Human

福井県立病院 看護部

宮嶋 仁美

18

Professor's Voice

福井大学医学部附属病院 内分泌・代謝内科
教授

原田 範雄

STAFF

Project Design 坂口 俊克
Writer 上乗 繁能／大廣 涼
Photographer 藤森 祐治
Designer 吉田 真人／西村 恭子
Cover Design 101%

発行／スギメディカル株式会社
〒101-0044
東京都千代田区鍛冶町一丁目7番6号
ヒルトップ神田ビル
TEL: 03-3518-5356 FAX: 03-3254-1339
E-mail: t.sakaguchi@project-ishin.net

命と健康を守る医療を支える
ALSOKは、とことん、あなたのために。



24時間・365日。
見守り、そして駆けつけます。



代表取締役会長 森 本 昇 代表取締役社長 久 島 泰 志

本 社 石川県金沢市松島1丁目41番地 TEL.076-269-8686
福井支社 福井県福井市成和1丁目1504番地 TEL.0776-23-1306

MINORU HASEGAWA

若い皮膚科医が育っている

いまから12年前の2013年、長谷川稔教授が初めて福井大学医学部附属病院に着任したとき、皮膚科の医局員はわずか「8名」だった。関連病院への出向者2名を含めての人数だから、福井大学医学部附属病院に残った医師はさらに少ない。しかも年齢的には、医師になって10年以内の若手医師がほとんどいなかった。

当時、首都圏など都会の医療機関では皮膚科を選ぶ若手医師は多く、人気の高い診療科の一つであった。

「なぜ、地方の大学には若手の入局者が少ないのだろうか？」

長谷川教授は、率直にそう思った。とはいえ、都会生活への憧れと、高齢者のがんの治療などに少人数で対応しなければならない地方大学に比べて、スタッフの数も充実している都会の大学や病院には人が集まりやすい。それもまた事実だった。

それから12年が経過した2025年、福井大学医学部附属病院皮膚科の医局はどう変わったか？

「現在、医局員は29名。当時から3倍以上に増加しました。それも、女性医師を中心に若いメンバーが揃っているのが特徴です」

長谷川教授は、そう言っって目を細めた。医局員が増えた理由を尋ねると、記憶をたどりながらこう続ける。

地方から世界の 最先端研究に 挑むダイナミズム！



「医局説明会を集中的に何度か実施したり、皮膚科の魅力や面白さをレクチャーする時間を当時はできるだけ作るようにしましたが、とりたてて変わったことはしていないと思います。人数が少なく大変な時期に支えてくれた医局員に感謝していますし、途中から当医局に異動してきた現在の准教授の存在も大きかったと思います」

地道な活動の積み重ねが、逆に人を引き寄せたのだろうか。赴任して2年目以降、毎年コンスタントに入局者がある。なかでも長谷川教授が誇れるのは、色々な専門分野で若手皮膚科医が着実に育っていることだ。

「指導医の中には、他大学で豊富な臨床や研究の経験を積んだ後、地元へ戻ってきた人が5名おり、元々の福井大学の強みと他大学の優れた診療、研究、運営方法を融合することで若手の成長にもつながりました」

皮膚がんやリウマチ性疾患の診療に強い

福井大学医学部附属病院の皮膚科は、いまでは女性医師が半数を超えるまでになっている。

「女性医師が増えるのは、私自身はいいことだと思っています。女性が生き生き働いている職場は、活気があって輝いています。それに手先が器用で、手術が好きな人も多い。皮膚科は全国的に女性が多いと言われますが、それでも大病院の大きな手術は男性医師が主体で行っているところが多いようです。し

かし、当医局の特徴は、若手で手術を専門にするいわゆる皮膚外科医はすべて女性で、国内のがん専門施設への留学も含めて大いに活躍しています。私の前任教授は腫瘍病理の大家で、皮膚科の中に形成外科班を併設していました。その流れを受けた現在の男性皮膚外科指導医のもと、当医局では腫瘍診療や手術に熟練した若手皮膚外科医を育ててきた経緯があります。これまで特に手術のトラブルはなく、私は手術を担当しませんが、皮膚外科医に安心して任せています」

皮膚科の疾患は種類が多く、外科的治療から内科的な管理が伴うものまでさまざま。対象患者の年齢層も、子どもから高齢者まで幅広く「皮膚と関連したさまざまな疾患を診られるのも、皮膚科の魅力であり、面白さだ」と、長谷川教授は強調する。

なかでも地域で評価が高いのは、皮膚疾患以外に、全身性強皮症（全身性硬化症）、皮膚筋炎などのリウマチ性疾患（膠原病）の診療に強いことだ。とくに長谷川教授の専門である全身性強皮症の患者は、赴任当初わずか数名だったが、これまでに数百名が受診するまでに変わった。

全身性強皮症は、リウマチ性疾患のひとつで、皮膚や内臓の血管障害や線維化があらわれる自己免疫疾患だ。リウマチ性疾患は、自己免疫異常により血管や結合組織に炎症がおこる病気のグループの総称で、全身性強皮症以外にも、皮膚筋炎、全身性エリテマトーデ



スなど、皮膚症状を伴うことが多い。
全身性強皮症は、いまでもはっきりとした原因は不明で、治療法も限られていることから、国の難病に指定されている。しかし、リウマチ性疾患は「ここ10年余りで、免疫や炎症を抑える生物学的製剤、分子標的薬、免疫抑制薬の登場で、治療が大きく進歩した」（長谷川教授）分野でもある。

全身性強皮症の治療薬に挑む

長谷川教授の研究グループでは目下、全身性強皮症の新たな治療薬開発をめざし、細胞、マウスを用いた独自の研究を進めている。

「全身性強皮症の基礎研究で、将来の治療につながるものはないか、マウスモデルを使って研究しています。候補となるような薬剤や抗体を投与して、とくに皮膚の線維化、肺の線維化を抑制できるかどうかを探っています。細胞を使った実験なども行っていて、いずれは創薬につながる研究成果を導きだしたいと考えています」

マウスモデルで良好な成果は得られつつあるものの、ヒトへの臨床応用や実際の創薬につながるまでのハードルは高い。長谷川教授は「強皮症の特徴である皮膚の線維化、肺の線維化をいかに抑制するかがポイント」として今後、製薬メーカーやベンチャー企業との共同研究などを通して、治療薬の実用化をめざしていく考えだ。

また、臨床研究面では、国と連携してデータの集計や解析なども行っている。その一つが、厚生労働省の強皮症研究班におけるレジストリデータの集計と、日本人患者の活動性や予後予測バイオマーカーを解析する作業だ。そして、全身性強皮症、全身性エリテマトーデス、皮膚筋炎などのリウマチ性疾患における新薬の臨床試験にも積極的に参加している。特に現在は、皮膚症状の強い全身性エリテマトーデスの患者さんがおられたら、紹介をお願いしている。

もちろん皮膚科学や皮膚疾患に関する研究も並行して進めている。独自作成したデルモカイン欠損マウスによる皮膚バリア機能の研究、皮膚腫瘍の臨床研究、乾癬のバイオマーカーの研究などにも取り組んでいる。

全身性の疾患が多いことから、診療にあたっては他の診療科との連携を重要視する。皮膚腫瘍、皮膚外科領域では、形成外科や整形外科、リウマチ性疾患では膠原病・感染症内科や各臓器内科、整形外科、小児科をはじめとする各診療科との連携が不可欠だ。当院では、複数の診療科で2ヵ月に1回のリウマチ性疾患の症例検討会を行うなど、綿密な連携で診療にあたっている。

地域の医療機関との連携も良好だ。長谷川教授は、12年前に福井に着任以来、福井県済生会病院に医師派遣した後、市立敦賀病院、福井赤十字病院、福井県立病院にも次々と医師を送り出している。いまでは県内主要病院

の皮膚科に医師を派遣しており、とくに皮膚悪性腫瘍や全身性強皮症については県の診療拠点にもなっているのだ。

若いときにどれだけ頑張るか

皮膚科ではいま、とくに力を注いでいるのは、皮膚腫瘍や全身性強皮症をはじめとするリウマチ性疾患など「患者の全身を診る」診療だ。その治療や研究の精度をさらに高めていくには、当然のことながら、重症例にも対応していける若手医師の育成にかかってくる。

皮膚科への入局者は毎年、切れ目がないとはいえ、福井県全体では「依然として皮膚科医不足」の状態にあるとして、長谷川教授は次のように訴える。

「皮膚科医をめざすにあたって、皮膚科は楽だからとか、美容もできるからという理由で選ぶ人もいます。でも地方の大学病院では、それでは通用しません。皮膚がんの治療ともしっかり向き合い、リウマチ性疾患のように、全身を診ていかないといけない患者さんもいます。研究の経験がないと、臨床にも幅が広がりません。医師や研究者としての力量は、結局のところ若い時期にどれだけ頑張るかです。患者さん一人ひとりと向き合い、地道に経験や実績を積んでいくかしかありません。若い時期に臨床や研究に全力を尽くし、国内外の留学を通して、第一線の医師と交流する。そういう経験を積んだうえで、

全身を診る皮膚科医、難治性の患者さんをしつかり診れる皮膚科医を育成していきたいと思っています。一旦一人前になれば、高齢になっても続けやすいのが皮膚科の強みだと思います」

皮膚科を選んで3年目に、全身性強皮症の大家である金沢大学の竹原教授と出会ったことが、人生の大きな転機になった。アメリカのデューク大学 (Duke University) 免疫学教室に留学し、帰国後すぐに抗CD20抗体の全身性強皮症のマウスモデルにおける有用性を世界で最初に報告した。その後10年以上経って、抗CD20抗体をヒトの全身性強皮症に投与する臨床試験に参加して保険収載に至り、以前は助けられなかった重症例を救えるようになった。まさにその経験が、若手医師を育成する土台にもなっている。

ある患者の遺言を糧に：

若手医師を育成するにあたって、どんな思いを伝えていきたいか？ 長谷川教授は、若かりしころ、ある患者から言われた言葉をいまでも思い出す。患者は、全身の皮膚硬化であらゆる関節が拘縮して寝返りもうてず、あらゆる関節部に皮膚潰瘍を起こして病棟処置には1時間を要し、食道硬化のために飲食ができない状態が続いた。

そのときに「このどうしようもなく辛い病気を治す方法を考えてください」と、主治医

であつた若き長谷川医師に伝えたそう。最終的に、患者は肺炎で目の前で亡くなったが、そのときの遺言は「いまも大きな課題」として心に残っている。

「私の理想は、その患者さんとの約束を果たせるような、世界最先端の研究や診療が行える臨床医を育てることです。大学院に入らなかった私が最も基礎研究に専念できたのは、アメリカ留学中の時だけでした。若い時にもっと研究しておけばよかったといまでも思います。そういう後悔をしないためにも、若い時期にしっかりと専門や研究と向き合って経験を積んでほしいと思います」

皮膚科の疾患は、同じ疾患でも患者によって症状が異なる場合が少なくない。患者によつては病歴が長い人もいて、必然的に診療が長期に及ぶこともある。それゆえ、皮膚科医として必要なのは「多少時間はかかってでも患者さんの話をよく聞き、納得していただける説明を心がけることが大切だ」と、長谷川教授は言う。

「患者さんの話をよく聞かずに先走ると、診断や治療ミスにつながります。話にじっくり耳を傾けて、患者さんの生活や背景を理解した上で、正しく診断し、最適な治療法を選ぶ。それが何より大事なことでいまも思っています」

臨床や研究の成果を、より多くの患者に還元するために。福井大学医学部附属病院皮膚科の挑戦は、これからも続いていく。

長谷川 稔 はせがわ・みのる

福井大学医学部感覚運動医学講座皮膚科学 教授

【略歴】

1967年 福井県勝山市出身
1991年 金沢大学医学部卒業、同皮膚科入局
1997年～ 金沢大学医学部附属病院皮膚科 助手
皮膚科専門医取得
1998年 医学博士取得
1998年 米国 Duke 大学免疫学教室
～2001年 (Thomas F. Tedder 教授) に留学
2001年～ 金沢大学医学部附属病院皮膚科 助手
2003年～ 金沢大学医学部附属病院皮膚科 講師
2013年～ 福井大学医学部感覚運動医学講座皮膚科学 教授





フードテックジャパンの提供サービスとして

- ・レストラン・カフェの展開
- ・売店・コンビニの展開
- ・自動販売機の設置
- ・入院セットのレンタルサービス
- ・床頭台のレンタルサービス



食「薬膳」の力で 職員・患者様に活力を！

「体に良くて、おいしくて、」



主な出店病院

- | | |
|--------|--------------------|
| 東北地区 | 仙台医療センター・JCHO仙台 他 |
| 東京関東地区 | 東京都健康長寿医療センター 他 |
| 三重地区 | 三重中央医療センター 他 |
| 大阪地区 | 大阪医療センター・岸和田市民病院 他 |
| 兵庫地区 | 神鋼記念病院・姫路医療センター 他 |
| 九州地区 | 九州医療センター・JCHO九州病院 |

☎ 078-783-6135

本社 〒655-0003 神戸市垂水区小東山本町2丁目2-1トキタビル3F

株式会社フードテックジャパン 公式ホームページ

<https://www.f-t-j.co.jp/>



Very Human

#福井県立病院



宮嶋 仁美 さん

Hitami Miyajima

の歩みを通して、福井県立病院看護部を
ひも解いてみたい。

週3日、看護外来へ 認定看護師として奮闘

まずは宮嶋さんのある1日を追ってみよう。彼女は皮膚・排泄ケアの認定看護師であり、今年4月からは褥瘡管理者に就き、忙しい毎日を送っている。勤務時間が始まって最初に足を運んだのは、「看護外来」だ。看護外来では、専門看護師や認定看護師など高い専門性を持った看護師が、在宅で安心して生活できるよう、患者の相談にきめ細かく対応している。ここで、宮嶋さんは火・水・木曜の週3日、午前中にストーマ（人工肛門・人工膀胱）を有する患者の悩みに耳を傾けている。

「漏れや臭いなど、患者さんはストーマに関するいろいろな悩みを抱えています。しかし、服を着るとストーマは隠れてしまい、周囲にストーマを管理しながら生活を送ることの苦勞が伝わりません。排泄に関することでもあり、仲のいい友達や家族にも話しくいという方が少なくありません」（宮嶋さん）

身近な人にも打ち明けられない悩みを抱える人にとって、専門知識を持った看護師に相談できる外来があるのはとても心強い。さらにいえば、排泄ケアだけで



『心あたたまる看護』で 県民の命を守る

福井県立病院は、高度急性期病院として地域医療をリードする存在だ。7つのセンター（中央医療センター、こころの医療センター、救命救急センター、母子医療センター、健康診断センター、がん医療センター、陽子線がん治療センター）を構え、三次救急医療や小児・周産期医療、災害医療、へき地医療などに幅広く力を注いでおり、県民の命と健やかな暮らしを守り続けている。

福井の中核となる医療機関で、県民に寄り添う医療の最前線に立つのが「看護部」である。多岐にわたる診療科で外来を担当したり、病棟で患者のケアにあたり、救急救命の現場や手術室で医師をサポートしたりと、院内の多種多様なフィールドで活躍している。

そんな看護部が掲げる理念は、「私たちは、日常生活行動の援助および診療の補助を通じて、地域の人々に信頼される、心あたたまる看護をめざします」。地域医療の現場に立ち、理念の実践に心を砕く一人が宮嶋仁美さんだ。2001年に金沢大学医学部保健学科看護学専攻を卒業してから現在まで、福井県立病院に身を置き、看護師として一歩ずつキャリアを重ねてきた。彼女の仕事ぶりやこれまで

はない。看護部にはがんや精神看護の専門看護師が在籍し、認知症看護や糖尿病看護、救急看護などの多彩な認定看護師、助産師もそろっている。看護外来では、がん看護やスキンケア、産後ケア、糖尿病療養相談など、実に多様な疾患や症状の悩みをサポートしている。

病棟スタッフと連携 褥瘡予防ケアに注力

宮嶋さんは、外来の患者さんの対応の合間をぬって、12階から1階まで院内のあらゆる病棟間を行き来し、入院中の患者さんの創傷やストーマ、失禁、そして褥瘡の予防ケアに取り組んでいる。圧迫された箇所の血流が滞ることや皮膚などに傷や障害が発生する褥瘡……。数時間でできるケースもあり、寝たきりの人だけでなく、長時間に及ぶ手術など、院内のあらゆる場面で注意が必要だ。福井県立病院では全国に先駆けて2001年に褥瘡対策委員会を立ち上げており、毎月医師や看護師、薬剤師、理学療法士ら多職種が参加する会議を開くなど、かねてから褥瘡対策に力を入れてきた。

そんな歴史を持つ福井県立病院で、宮嶋さんは院内の褥瘡対策をリードする一人。病棟の看護師や他領域の認定看護師や専門看護師など、各部門の医療スタッ

フと連携し、患者さんのケアやスタッフ教育に取り組んでいる。「床ずれは診療科に関係なく、発生するものです。ですから、多岐にわたる領域のスタッフと連携を深めて改善に取り組んでいます」と話す宮嶋さん。こうして看護師としての1日は忙しく過ぎていく。

“ほめる”ことで考え方も前向きに

患者の相談に応え、病棟の看護師や他職種とともに褥瘡や創傷、ストーマ、失禁に関するケアに力を注ぐ。そんな毎日の中で、宮嶋さんが常に大切にしていることがある。それは“ほめる”ことだ。たとえば、看護外来を訪れた人には、「ストーマ装具につけたカバー、かわいいですね」「手際がいいですね。丁寧にされていますね」「お洋服、とっても素敵です」など。会話の中にポジティブな言葉をいくつも盛り込んでいく。

「ストーマを有する患者さんは自己肯定感が低くなる傾向があります。お通じに関する悩みはストレスが大きく、他人と比べ、『こんな状態になってしまった』と自分自身に自信をなくし、悲観的な言葉を発することも少なくありません」

宮嶋さんはこう指摘し、さらに言葉を続ける。「当たり前のことですが、誰かと比較しなくていいんです。生活環境も違

宮嶋さんがこう話すように、福井県立病院では看護方式として「チームナーシング」を実践している。さらに、中堅看護師と新人がパートナーを組み実践する「パートナーシップ・ナーシング・システム」や「セル看護」を導入するなど、教育サポート体制も充実。新規採用看護職員教育プログラムを始まりに、マネジメント能力を身につけたスペシャリストの育成まで、「福井県立病院キャリアラダー」を整備しており、明確に目標を掲げて着実にステップアップできる環境づくりを進めている。

職場の支援も生かし 認定看護師に

この福井県立病院キャリアラダーに沿って、宮嶋さんも看護師としてのステップを上って来た。ただ、最初からいまのような成長ストーリーを思い描いていたわけではない。新人のころ、興味があったのは救命救急の現場で、看護師として第一歩を踏み出したところに配属されたのはICUだった。ICUで2年間働いた後、外科病棟に異動。6年ほど研鑽を積んだ時に、看護師人生の転機が訪れた。

病棟看護師として、潰瘍性大腸炎を患った男子高校生を受け持った。内科的治療だけではなかなか改善が見られず、手術



えば、性格も違う。病気の治り方も、向き合い方も異なっていて当然です。だからこそ、患者さん個々に寄り添っていきたいと考えています」

福井県立病院看護部が掲げる5つの基本方針の一番目には、こう書かれている。

「患者さんの尊厳をまもり、笑顔と安心・安全な看護を提供します」。患者と接する宮嶋さんの姿勢は、まさにこの基本方針を地で行くものであり、理念である“心あたたまる看護”の一例といえるだろう。

「ありがとう」を大切に チームナーシングを推進

“ほめる”を大切にする姿勢は、スタッフに向けても変わらない。なぜなら、どれだけ知識を蓄えたとしても、どれほどスキルを高めたとしても、一人でできることには限界があるから。患者に寄り添い、適切にサポートしていくためには、チームで看護していくことが不可欠だ。

「認定看護師は、決して先頭を走っているわけではありません。ベッドサイドでの実践者としての役割はほんの一部でスタッフを支える役割が大部分を占めています。最前線で患者さんを看護するのは病棟や外来のスタッフです。一緒に仕事をする仲間には必ず声をかけ、『ありがとう』の感謝を忘れないようにしています」

を行った彼はストーマを造設することになったという。だが、ストーマの袋から便が漏れ出るなどのトラブルがたびたび起こり、ストーマの管理に難渋したそうだ。傷の治りも芳しくなく、10代であっても床ずれにも悩むようになっていた。

「担当看護師として、自分自身の力不足を痛感しました。当時もストーマの研修に参加し、専門書にも目を通したんです。それでも、実際のケアは上手いかなかった。彼もご両親も本当につらかったと思います。大好きな野球もできず、18歳の貴重な時間を、病室のベッドの上で過ごさせてしまいました」

これまで感じたことのない後悔の念が背中を押した。宮嶋さんは、専門知識と技術を一から身につけるため、皮膚・排泄ケアの認定看護師になることを決意。そして、2014年に7カ月間にわたって仙台的認定看護師スクールに通い、各地から集まった看護師と切磋琢磨しながら目標を成し遂げた。

「看護部もキャリアアップをサポートしてくれました。休職することなく、認定看護師教育機関に通えるようにしてくれましたし、職場の皆さんも応援してくれました」と宮嶋さん。福井県立病院では、彼女のようにキャリアアップを目指すスタッフをバックアップしている。また、認定看護師が研修を企画・開催し、専門



Very Human

分野の基礎知識・技術を身につけるコア
ナースの育成にも努めている。

さらに、宮嶋さんは2018年に創傷
管理の特定行為研修も修了。壊死組織の
褥瘡に対するデブリードマンや創傷の治
りを促進するための陰圧閉鎖療法、乳腺
の術後の患者さんのドレーン抜去や抜糸
など日常的に患者と接する看護師の立場
から、いち早い回復を目指したきめ細か
な対応に取り組んでいる。

一つひとつの経験を糧に ともに歩んでいきたい

「看護師になって25年、患者さんに教え
てもらったこと、あたたい言葉をかけ
てもらったことは数え切れません」。

こう言葉に力を込める宮嶋さんは、高
度急性期病院で重ねた一つひとつの経験
を糧に、看護師としての道を歩んできた。
もちろん、福井県立病院看護部からつな
がる道は一つではない。あらゆる診療科
がそろい、幅広い分野の地域医療に力を
注ぐ環境だからこそ、看護師一人ひとり
がそれぞれの未来図を描くことができる。

福井県立病院には、自分だけの看護師
像を目指してひたすらに歩む若者たちが
たくさんおり、そんな彼・彼女たちの背
中に宮嶋さんも懸命に後押しする。「私自
身、キャリアを重ね、だんだんと若手を



育てていく立場になっていきます。心あた
たまる看護”に取り組める職場で、看護
が好きな看護師を一人でも多く育ててい
きたいですね」と、宮嶋さんは笑顔でこ
れからの目標を伝えてくれた。

並行して、自分自身のさらなるステッ
プアップも視野に入れている。宮嶋さん
は休日に家の片付けや整理に時間をかけ
ることが多く、そんな性格を生かして「整
理収納アドバイザー」の資格取得を目
指しているようだ。「物に溢れた煩雑な
ナースステーションでは物を探す・片付
けるにも時間がかかります。物を大事に
し、動線も短く、安全で誰もが仕事がい
やすい環境づくりにも活かせたらと思い
ます。また、在宅看護のニーズは今後ま
すます高まっています。自宅で療養生
活を送っている方のご自宅に訪問した際
に、看護だけでなく、生活面の支援にもつな
がるんじゃないかなと思ったんです。実
はもう、テキストは購入済みです」と笑
う宮嶋さん。看護師を目指す学生や新人
看護師に向けても、「看護師になってよ
かった。そう思える未来がくるように、
失敗や恥を恐れず、挑戦をつづけていき
ましょう」と、優しい表情でエールを送っ
てくれた。福井県立病院看護部で輝く彼
女のような医療人一人ひとりの奮闘が、
福井の地域医療を支えている。

Very Human

D C P ソリューションは
豊富な経験とネットワークを持つ
先生方のよきパートナーとして
開業支援サービスを提供しています。

ドラッグストア併設で 理想の開業を！

D C P ソリューションの提供サービス

経営理念、診療方針の作成
開業までのスケジュール作成
開業地の選定、診療圏分析
事業計画の策定
融資の打診及び交渉
設計、内装業者紹介及びアドバイス
医療機器選定
税理士、公認会計士の紹介
広告相談
従業員募集、採用、教育の補助
開設手続き
開業後の経営支援、拡大展開
継承支援



DCP Solution スギ薬局グループ

0120-911-545

平日(土曜・日曜・祝日を除く)の9時00分～18時00分

<https://dcp-sol.com/article/docvoice/>

開業の事例や
先生方の声が
ご覧頂けます



拠 点

- 関東エリア(本社) ●東京都千代田区鍛冶町一丁目7番6号
ビルトップ神田ビル
- 中部エリア ●愛知県大府市横根町新江62番地の1
- 関西エリア ●大阪府大阪市淀川区宮原一丁目2番4号
新大阪第5ビル13階
- 北陸・長野エリア ●石川県金沢市藤江北4丁目280番地

UNIVERSITY OF HOSPITAL FUKUI

#原田 範雄

neo
MEDICAL INFORMATION MAGAZINE

スタッフや地域とスクラム

チーム医療で挑む！

内分泌代謝疾患の最前線

Endocrinology & Metabolism

NORIO
HARADA

Professor's Voice



2000万人以上が罹患 糖尿病診療に注力

糖尿病は紛れもなく国民病だ。高齢化や食生活の変化などに伴い、患者数は増加している。疑いがある人まで含めると、日本人の5〜6人に1人に相当する約2000万人が患っているとされている。福井大学医学部附属病院の原田範雄教授は、この国民病の改善に向けて心血を注ぐリーダーの一人だ。

実際、原田教授が現場で向き合う疾患の多くが2型糖尿病であり、同病院内内分泌・代謝内科領域では入院患者の約8割が患っている。その治療には医師一人だけでなく、多くのメディカルスタッフとの連携が欠かせない。

「糖尿病を治療していくためには、食事・運動を中心とした生活改善も、薬の服用も大切だ。栄養士や薬剤師、在宅療法部門の看護師など、チーム医療で患者さん一人ひとりをサポートしています。認定資格を持つ看護師によるフットケア外来も行っています」と、診療科の特色について教えてくれた原田教授。同病院内では幅広い医療専門職のスタッフとともに「チームガンパロッサ」を結成しており、月に1度は会議を開き、よりよい診療体制の

構築や情報共有を目的に活発な意見を交わしている。

さらに言えば、連携を深めるのはメディカルスタッフだけではない。福井大学医学部附属病院には糖尿病患者の会「医糖会」があり、同じ病気を抱える人たちが励まし合いながら食事療法や運動療法などに取り組んでいる。原田教授も医師として患者会の活動を支援しており、患者とメディカルスタッフの交流イベント開催を統括している。普及啓発にも熱心で、秋に開催する「糖尿病オースタムフェス」(主催…福井県糖尿病協会)では原田教授が特別講演に立っている。

肥満症と甲状腺の 専門外来を開設

原田教授が福井大学医学部附属病院に来てから1年、新たな取り組みをスタートさせている。その一環として、2つの専門外来を開設した。

一つが「肥満症外来」だ。肥満(BMI 25 kg/m²以上)と肥満に関わる健康障害をもつ状態は肥満症と診断される。肥満症の改善を目的に、2024年7月に開設した。「肥満症に対しては、外科手術である腹腔鏡下スリーブ

状胃切除術が2014年に、腹腔鏡下スリーブ・バイパス術が2024年に

保険適用になりました。ただ、食事・運動療法で改善がみられないからと、いきなり手術を行うとなると、ギャップが大きい。その差を埋めるために、肥満症外来では肥満症治療薬を組み合わせた食事・運動療法でアプローチしていきます」と原田教授。高度医療に取り組む大学病院での専門外来への関心は高く、今年から週1回から2回(水曜・木曜の午後)に増やしており、県内各地から来院者は増えているという。もう一つが、毎週水曜に実施する「甲状腺外来」だ。今年5月にスタートした専門外来では、バセドウ病や橋本病などの甲状腺疾患に対して、甲状腺専門医が中心となって適切な治療と継続的なフォローアップを実施している。

「福井県内の甲状腺専門医は数少ないのが実情です。一方で、甲状腺疾患の専門的な診療に関する地域ニーズは高まっています。そこで、県内唯一の大学病院として福井大学が率先して取り組みことにしました」と、原田教授は積極的な専門外来開設の狙いを教えてくれた。

また、2024年に原田教授が音頭を取って病診連携の会を発足したもの、

この1年のトピックといえるだろう。

「糖尿病は長く付き合う病気であり、患者さんによっては様々な合併症・併存症を持っています。大学病院だけでなくすべての患者さんをカバーするのは不可能であり、地域の先生方との協力体制の構築が欠かせません」。原田教授はこう語り、ネットワークの構築に奔走している。同病院が発行する広報誌に、作成した内分泌・代謝内科のリーフレットをはさみ込み、福井県を中心に約900の医療機関に配布するなど、病診連携に向けたメッセージを積極的に発信している。

ビッグデータの活用など 先進的な研究を推進

大学病院は、臨床とともに先進的な研究も大きな柱となる。原田教授も一歩も二歩も先を見据えた研究に力を入れている。たとえば、ビッグデータを用いた糖尿病や代謝疾患に関する調査である。とりわけ狙いを定めるのは、高齢化とともに急増する高齢者糖尿病だ。福井県国民健康保険団体連合会が管理する国保データベースシステムを解析。膨大な情報をひも解き、介護度と糖尿病の関係性を探ったり、治療薬

がどのように扱われているかの実情を明らかにしたりと、福井県内での実態の解明を通して高齢者糖尿病の効果的な治療法の確立・提案をめざしている。

また、「インクレチン」の研究でも数々の実績を残している。インクレチンは、インスリンの分泌を促す消化管ホルモンで、約10年ぶりの糖尿病治療薬として2009年にインクレチン関連薬が国内で使用可能となり、現在では糖尿病や肥満症の治療にパラダイムシフトをもたらしたホルモンとして広く認知されている。原田教授はいち早くその有効性に着目。京都大学大学院に在籍していたころから20年以上にわたって、インクレチンの基礎・臨床研究に力を注いでいる。たとえば、マウスを用いて、インクレチンを分泌する腸管内分泌細胞を可視化し、分泌メカニズムを解き明かす研究などに取り組んだ。これまでの研究成果から日本人に関して食後に分泌する総インスリン量の約60%がインクレチンによる効果であることを実証しており、「インクレチン関連薬は日本人をはじめ東アジア人にマッチした薬です」（原田教授）と一層の研究の進展に期待感を膨らませている。

予防医学の重要性を知り 糖尿病研究の道へ

臨床の現場で地域の人たちとふれあい、糖尿病診療の新たな地平を切り拓く研究にも情熱を注ぐ原田教授。医師人生を歩む決意を固めたのは、ふるさとの尼崎市で青春時代を送っていた高校2年生のときだった。「父が病気になるんです。加えて、自分自身も小さなころは病院のお世話になることが多かった。そこで、家族が病に倒れたときに、正しい判断ができるように医師を志しました。もう一つ、実家の家業を継ぐように言われていたのですが、どうしても自分には向いていないと感じていたからもありますね」。こう苦笑いを浮かべる原田教授は奈良県立医科大学に進み、卒業後は同大学附属病院や愛知県内の病院で研鑽を積んだ。

当初踏み出したのは、循環器内科の道だった。脳卒中や心筋梗塞などの起因となる動脈硬化の改善に向けて、患者と長いスパンにわたって関わってきたいと考えたからだ。

「循環器系の内科医として働く毎日はとても充実していました。一方で、診察する患者さんの半分近くが糖尿病を患っていて予防医学の重要性を再確

認したのです」（原田教授）。

その事実が現在へと続く端緒となった。「再び学ぶことから始めたい」と京都大学大学院へと進み、インクレチンをはじめとした糖尿病の先進的な研究にのめり込んでいった。最前線出会った恩師の影響も大きかったという。恩師とは、指導教官を務めた京都大学の清野裕名誉教授（現関西電力病院総長）と稲垣暢也名誉教授（現北野病院理事長）だ。若き原田医師は当時、学位を取得したら一般臨床に戻る気持ちでいたそうだが、第一人者お二人からの勧めで20年以上にわたって京都大学でキャリアを重ねていくことになる。

「臨床は標準的治療が求められ、研究ではまだ誰も知らない分野を突き進んでいきます。つまり何が分かって何が分からないかの線引きがされているわけですが、そこを自分で判別していいのではないかと思ったのです。そして、明らかになったことは臨床に生かし、まだ不確かなところは研究を重ねていく。その繰り返しの中で、モチベーション高く、医療と向き合うことができました」。原田教授は、現在地に至るまでの医師としての歩みをこう振り返る。

若手も地位も関係なく 自由に意見を交わす場に

臨床と研究を両輪に、多彩な経験を重ねてきた原田教授が、新たな挑戦の舞台として選んだのが、福井大学医学部附属病院だ。高度医療だけでなく、地域医療により軸足を置いた診療科のトップとして後進の指導も熱を帯びている。「福井県内の内分泌代謝疾患に関わる専門医数は全国的にも少ない状況です。ぜひとも、私たちの教室の扉をたたき、やりがいある専門医の道をめざしてほしい」。原田教授はこうメッセージを送り、風通しのいい職場づくりにも知恵を絞っている。その一環として、若手医師の働き方改革にも取り組んでおり、最近では育児休暇を取得する男性医師も増えてきたそうだ。

また、カンファレンスの際、原田教授は年齢や経験、立場に関係なく、活発な意見を求めている。「内科学（3）分野から分離・独立してから日も浅く、所属する医師の数もまだ多くはありません。裏を返せば垣根が低いともいえ、その和気あいあいとした雰囲気からこれからの大切にしていきたいと考えています。私が大病院にいるときは、教室員がいつでも訪ねてこられるように

教授室はいつもオープンにしています」と原田教授。チーム医療が要となる内分泌代謝疾患の診療と同じく、スタッフ一人ひとりのディスカッションを通してより魅力的な教室を築き上げているところだ。

ライフステージに合わせ 最善の治療を提供したい

このように、臨床と研究、そして若手の育成、働きやすい環境づくりなど、さまざまな角度から診療科のトップとして忙しい日々を過ごしている。そんな原田教授にとって、医師としての理想像とは何だろうか。その答えは、「患者と長年にわたって向き合いたい」と循環器系の内科医を目指した若手のころから変わっていないのかもしれない。

「私にとって、受け持ちの患者さんはたくさんいます。しかし、患者さんから見ると、医師は私一人しかいません。病気だけを診るのではなく、一人ひとりとしつかり向き合い続けていきたいと願っています」と原田教授。糖尿病などの疾患は、医師と患者の付き合いが長くなるケースが少なくない。当然、患者自身の年齢も体力も変われば、生活環境も歳月とともに変化して

いく。原田教授は、そのとき、そのときのライフステージに応じて最善の治療法の提供に全力を注いでいく考えた。とはいえ、肩ひじを張り続けているわけではない。休日になると、趣味のサイクリングで、あわら温泉や三国海岸などに足を延ばしているそうだ。「自然が身近で、これからの季節は紅葉が本当にきれいですね」と、柔和な表情を浮かべる原田教授。福井でのプライベートを楽しみながら、「高度医療の確立」と「地域医療の充実」に挑む毎日はまだ始まったばかりだ。

PROFILE

原田 範雄 はらだ・のりお

福井大学医学部附属病院 内分泌・代謝内科
教授

【略歴】

1996年 奈良県立医科大学 医学部 卒業
2003年 京都大学大学院医学研究科 内科学専攻 博士課程 入学
2009年 京都大学医学部附属病院 糖尿病・栄養内科 特定助教
2010年 同 助教
2014年 京都大学医学部附属病院
糖尿病・内分泌・栄養内科 病院講師
2017年 京都大学大学院医学研究科
糖尿病・内分泌・栄養内科学 講師
2019年 同 准教授
2024年 現職

想いを伝える、

変わりゆく時代に 新しい医療を

この度、第9号を発刊することができました。
取材に協力していただきました医療者の方、
協賛して頂きました企業様におかれましては
心より感謝申し上げます。
今後とも末永くご支援の程よろしくお願い申し上げます。

これからもわたしたちは、はたらく医療者の姿を、
地域の医療界全体へ発信してまいります。

協賛社募集

私たちは「医療情報誌 neo」の活動に
ご賛同いただけるスポンサーを募っています。

neo
✧ MEDICAL INFORMATION MAGAZINE ✧

力を貸してください。

医療を支える。 人と地域の未来のために。

私たちが幸せな人生を歩むために、医療は、必要不可欠です。

しかし、世の中の変化とともに、医療は今、多くの課題を抱えています。

医療人材の採用から育成、キャリア支援、仕組み作りまで

私たち MCS は、HR（ヒューマンリソース）の分野で、医療の課題解決に向き合います。

医療関係者、生活者、地域社会、その未来のために。



「地域」と「医療」の架け橋として ヒューマンリソースの問題をトータルで支援する

スギ薬局グループ



詳しくは WEB へ



neo
MEDICAL INFORMATION MAGAZINE

福井県内で活躍する医療従事者に焦点を当てた地域密着医療情報誌として、県内の医療機関へ3カ月に一度配布しております。
最先端医療から地域医療、また人々の暮らしに寄り添うクリニック、在宅医療・福祉など幅広い分野を取り上げております。
この雑誌が福井県内の医療者と医療者を結ぶひとつの情報ツールとなり、福井県の医療活性化に少しでもお役に立てることを目的としております。

バックナンバー紹介



